

「仏法練行ノ心」と和歌

—— 頓阿の自己研鑽の道 ——

野 中 和 孝

はじめに

十四世紀初め頃、定家・為家から為世に伝受された二条家伝は、頓阿をはじめとする四天王に相次いで伝授された。中でも「古今集」家説を最初に伝受したのは頓阿であり、それは元応二一三二〇年七月（『伝心集』による）のことである（注1）。頓阿にとつての和歌は当初家伝の正統の伝受者としての自覚のもとにあつたと思われる。それが時代の流れの中で、二つの方向への展開を見せていく。そのことを順次捉えてみたい。

一 二条家伝の伝受者

十四世紀中ごろに成立した歌学書『井蛙抄』には、二条為世から頓阿に伝授された二条家伝が残されている。とくに卷六（雑談篇）には他書に見えない口伝の内容が記されている。

卷六（雑談篇）は現存本の最大のもので一〇三節からなるが（天理図書館蔵本）、そのうち十九節の為世伝（故宗匠云）、二十八節の為藤伝（戸部云）、十一節の定為伝（一条法印云）が記されている。合計五十八節はともに二条家伝として頓

「仏法練行ノ心」と和歌

阿が伝受したものである。

さて、卷六第六一節に、為藤伝として「仏法練行ノ心通和哥」（注2）という語句が見出される。

戸部云。高尾文学上人哥五首詠て、京極禪門許ニ持来。「皆々志珍重也。仏法練行ノ心通和哥説」之由、記録被書載。都賀ノ尾ノ明恵上人ハ、此道数寄異に他也。仍新勅撰にも哥あまた被撰入。又自「遣心集」之集を書て、哥をあつめられたり。文学上人数寄被相統歟。

これは文覚（文学）上人の数寄心を褒め称えている箇所であるが、その中に上人の言として「仏法練行ノ心通和哥」の語句を伝えている。この箇所の直後には心源上人の言い伝えとして、文覚（文学）上人と西行との邂逅のやり取りが記されている（第六二節）が、この言は仏道者にとっての数寄、とりわけ和歌の役割を位置づけてくれる注目すべき記述である。

二条家伝の伝受者頼阿にとって、和歌が仏道練行の心と同じであり、自己研鑽の道に通じるといふ先学の言は重要な意味をもって受容されたであろう。後述するように頼阿の三十代から晩年にかけての和歌事跡を見ても、一貫してこのことを実践していったことがうかがえる。

二 他家伝との出会い

二条家伝の正統な伝受者頼阿であるが、その後時代風潮により二つ方向に大きく展開していく。その一つの方向が他家他流との交流である。『井蛙抄』卷六（雑談篇）には他家伝が残されている。

十四世紀中頃にはすでに消滅していたと思われる六条家のほかに、住吉神社の神主津守家、さらに二条家と拮抗した冷泉家などの家伝が記されている。これらの背景にはこれらの家と血縁上のつながりを成していたというだけでなく、

頓阿の和歌への取り組みの姿勢の変化を見逃せまい。すなわち、二条家伝の正統の伝受者でありながら、和歌表現の創意工夫をめざす頓阿にとって、他家他流の教えにも関心を示しているのである。そこには頓阿の歌道追求の真摯な姿勢があつたということである。

六条家伝については顕家―行家―隆博―隆教までの逸伝が記される。知家が定家の門弟であつたのに、定家が亡くなると「向背の心」を生じ「不知恩」とされたこと（第四二節）、隆博が名所百韻連歌で為家と付け合いをし「さすが也」とされたこと（第四五節）、隆教が宗匠亭（為定邸）での歌会に出席し「披講躰もてなしたるさまなどさる人」とされたこと（第七八節）などである。

津守家の秘伝については国基をはじめ、それから九代孫の国助―国冬の逸伝が記される。国基が小鱈を好んでいたのの後拾遺集の異名が「小鱈集」となつたこと（第六八節）、国助が「今主神」と号され、為世撰の新後撰集に十七首入集したこと、その子の国冬が和泉守通経の住吉神への姿勢を好んでいたこと（ともに第六五節）などである。

さらに冷泉家については為相子の為秀の伝が『井蛙抄』巻六末に集中している。公任卿が拾遺抄を好んだのに対し、定家が拾遺集をもてなし後鳥羽院にも言上したこと（第九九節）、花園院の両序が付された風雅集撰進の際、花園院が為兼の「鳥のねものどけき山のあさあけに霞の色も春めきにけり」を「本にもすべき」としたこと（第一〇一節）、為家卿が宇都宮（宇津宮）頼綱の婿になる折、定家が「道稽古せらるべきにあらず」と申したこと（第一〇二節）などである。

三 和歌と連歌の拮抗

もう一つの方向は堂上のみならず僧や地下の間にも広まっていた連歌の台頭である。吉田兼好の『徒然草』第八九段には、「連歌の懸物」にうつつを抜かす法師の失態ぶりが記されるが、これは当時の連歌のありようを示す一面でもある。

連歌の歴史は古く、また、歌学書にも連歌論が記されるようになる。その嚆矢は源俊頼の『俊頼髓脳』（成立の下限永久二一114年末、上限天永二一111年初め）である（注3）。その後連歌論として成立したのが、関白になった二条良基の『連理秘抄』（救済奥書本には貞和五1349年七月十七日とあり、それ以前近くに成立）である。そこには連歌の初期のものとして、万葉集の例を引いている（注4）。

万葉に尼が、

さほ河の水をせきあげてうへし田を

といふに、家持卿

かるはついねはひとりなるべし

と付けける、かやうの事古き勅撰にもおほく見ゆ。

この書にはさらに初心者連歌の学び方、本歌・本説・名所の用い方などから、発句・脇句の詠み方などの十七条の項目が示されている。

この風潮は「准勅撰」の論旨が出され（『園太暦』注5）、連歌菟玖波集の成立（文和六1357年春頃）へと展開していく。

さて、『井蛙抄』巻六（雑談篇）に戻ると、当時の連歌の広がりや次のように記している。

・六条内府被語云。入道民部卿、嵯峨中院亭にて発句一にて、千句連哥をせられけり。其時発句の本をして、後代までのごさんとて、

にしきかと秋ハさかののみゆる哉

今世発句、いかにかやうになからんとぞおぼゆる。

（第七八節）

・信実入道、九月尽日、好子あまたさそひて、深草立信上人許にまかりて、連哥侍りけるニ、禪門発句ニ云、仍
けふハはや秋の限ニ成にけり

よもすがら連哥にあかして、次朝帰駕をもよほしけるニ、「今日ハ初冬にて侍ニいかゞ。さてハ候べき」と上人被申
て、又連哥ありけり。自余好士ニ式代もなく、又禪門発句被出けり。

けさハ又冬のはじめに成にけり

発句ハ宴を、こす事をいふ斗にて、あながちニ風情をもとめざる歟。

(第七九節)

・冷泉亞相為氏、秋比立信上人の深草の寺にて、連哥をせられけるに、無生が彼所ニありけるを召出、発句をせさ
せられけるニ、

なげやなげ露ふか草のきりぎりす

としたりけるを、面々被感けり。いかに此比の花下の友がら、かやうにせざらんとぞ覚侍る。

(第八〇節)

いずれも連歌の発句例を掲げながら、「発句ハ宴をこす事をいふ斗にて、あながちニ風情をもとめざる」という連歌
論が記されている。

これと先の良基の『連理秘抄』とを比較すると、発句について次のように記す。

心を深く埋みてきと心得ぬようにするも一つの体也。＼発句に時節の景物背きたるは返々口惜しき事也。＼景物の
宗とあるがよきなり。

(37—38)

良基の「心を深く埋みてきと心得ぬようにする」という認識は、頼阿の「あながちに風情をもとめざる」に通じるで
あろう。

また、『井蛙抄』に当時盛んであった花下(はなのもと)連歌のこと、その一人として無生のことが記されていること

にも注目される。

さらに頓阿の家集『続草庵集』巻五には連歌部があり、百句の連歌が掲げられている。その中から、いくつかを引用してみる（注6）。「上段Ⅱ主、下段Ⅱ頓阿の例。」

故郷にかへるとみつる夢覚て／枕のうへになくつるのこゑ

袖こそすみの色に成りぬれ／春くればかれのすすきやきすてて

その位たかきは玉のかぶりにて／こずゑの蟬や露になくらん

うきにたぐひはなきみなりけり／あらし吹松をとなりの嶺の庵

月をみて枕さだめぬよすがら／かぜにおきふす庭の萩はら

心なきにも友はありけり／山水や岩木のかげを流るらん

雨のふるにも猶ぞまたる／夜な夜なの月にはきかぬ郭公

きぬたの音ぞ高く聞ゆる／秋寒き嶺の庵に人すみて

唐突に「つるのこゑ」と付けたり、「すみの色」に付けて「すすきやき」としたり、「位たかき」に付けて空から降り

た「露」で受けたり、心情を思いやって「嶺の庵」と付けたり、ひとり寝のつらさの「かぜにおくふす」と付けたり、

慣用語をもじって「山水や岩木」と付けたり、人待つものとして「きかぬ郭公」と付けたりしている（注7）。

脇句について、同じく『連理秘抄』には次のように記している。

脇の句、又以大事也。物浅きやうにするするとしたるも一つの体也。何れも発句によるべし。只の下句の様なるもあり。又変りたるもあり。如何にも聊かはるべき也。只思合ひたる様にすべし。離れ離れなるはわるき也。＼発句脇の句より次第にするすると付よき様にしなすべし。上手の一座は上は長閑にて早くゆくなり。下手の寄合ひたる

595 591 589 588 580 573 570 567

は、或はつまり、或は物騒がしくて感興を催さず、風情を失なふ也。道を翫び、会をくはだてん人、殊に此事を存べし。

(39)

『連理秘抄』は草案本『僻連抄』に救済が校閲訂正したのだが、救済奥書本の書写年代と『井蛙抄』の最終的成立とかなり近いこととなる。したがって、上句と下句（あるいは下句と上句）がイメージの連関によって連結するという頓阿の和歌の発想法（後述）は、連歌の試みの中から培われたということ、さらにそれは良基の連歌論にも共通した認識となつて継承されたということである。

ここで想起されるのは、定家が主張した「よくよく心をすまして、その一境に入ふ」す（『毎月抄』）という歌境の吐露であり（注8）、頓阿も良基もその延長線上に極められていったということである。

四 和歌への帰趨

ほぼ同時期に生を受けた頓阿と兼好はともに二条家伝を伝受したのだが、連歌への思いはかなり違ったようである。二人の家集によると、兼好の二八六首（尊経閣文庫本）に対し、頓阿は二〇〇一首（書陵部蔵本、正統合計）という規模の違いがある中で、兼好には邦良親王との連歌が一句のみに対し、頓阿には花山院右大臣（家定）・中園入道太政大臣（公賢）・為量などと百句が見えている。ここに頓阿の連歌の試みが多く見られるのだが、とはいいいながら頓阿の連歌論には展開が見られない。

家集によると、頓阿には出家後の三十代以降も、ますます歌壇交流の意識が強くなっていく。歌会や歌合への参加が増していったことからそのことが明らかである。それは伝来の二条家流にこだわるのではなく、自己の生き方を直視しながら和歌表現を追求するということであつたと思われる。ときには自ら歌題を要請して詠歌体験を重ねていくこと

する行動であつたり、ときには地下に流行していた連歌の表現法に学んだりするという詠作態度は、頓阿の歌の門下となつた二条良基に継承されていった。結果として、良基が連歌の式目（注9）を完成する間接的な手助けをしたこととなるのである。

頓阿と良基の二人には問答による『愚問賢注』が残されている。そこには次のような頓阿の和歌の詠作態度が示されている。

所詮人のいまだ不詠風情を、やすらかに艶なる詞にてつづくべき也。しかれば心詞ともに得がたし。得がたく事尽たるうへをしめて案ずれば、さすがに又出来事也。かく案じて一首もよまむを稽古とは申べきなり。

さらに、『連理秘抄』には次のような良基の連歌の詠作態度が示される。

連歌は心よりおこりて、みづから学ぶべし。さらに師匠の教ふるところにあらず。常に好み翫びて上手にまじるべし。如何にすれども、堪能に交らざればあがる事なし。不堪のものにのみ会合して稽古せんは、中々一向無沙汰なるにも劣るべし。初心の程殊に用心すべき事也。達者尚しばらくも辺土に隠居しぬれば、やがて連歌の損ずるはこの故なり。夙夜に好みて当世の上手の風体を、彼等がする所の懐紙を見て、よくよく心をとどめ風情をめぐらすべし。只堪能に練習して座功をつむより外の稽古はあるべからず。

これらに共通する言葉として「稽古」があることに気づかされる。積み上げられた「稽古」の成果によって、頓阿の和歌は成長していったということもできる。そこで忘れてならないのは定家の唱えた「一境に入ふ」す境地に通じるということであり、歌道の本質を正視する定家精神がここでも継承されていたということである。

五 定家精神への回帰

定家の説いた詠作態度をここにあらためて捉えておきたい。『毎月抄』（為家奥書の成立が承久元1219年七月二日）は二条家には本書の伝来がなく、為家の奥書本あるいはそれに冷泉為秀の奥書の加わった伝本が原形に近いとされている（注10）。

定家への回帰はすでに『井蛙抄』に確認できるところである。その教えは為家を経て冷泉為秀によって守られていくのだが、頼阿にはその為秀に学ぶ時期もあつたことはすでに指摘されている。

『毎月抄』（冷泉為秀奥書本）の中で師の教えを受けて詠出することの大切さを主張し、それが父俊成の教えであつたことを説く箇所がある（注11）。

・若我にこえて物をもたかくあんじ、すぐれたるすがたを天骨とよむ人のあらんに、かやうに提撕せばなにかよろしく侍べき。俊頼朝臣・清輔などの庭訓抄にもこのよしをバよく申ためりとぞみえ侍る。かまへて邪にむくところをぞいかにもまもりをしふべきにて候。如此器量なる人も、をしへをうけずして雅意にまかせてよみられたれば、口の自然二邪におもむく事の候なる。まして不器の人のことにわれとただをさへてよみならハむとし候へバ、あしくなり行候へどもすぐになるみちは候ハず。

・哥にハマづ心をよくすますハ一の習にて侍也。我心に日比おもしろしと思得たらん詩にてもまた歌にても心にをきて、それを力にてよむべし。

・初心の程ハあながちにあんずまじきにて候。さやうに哥はただあんずべき事とのみ思て間断なく案じ候へバ、性もほれ、かへりてしりぞく心のいでき候に候。「口なれんためにハはやらかによみならひ侍べし。さて又時々しめやかにあんじてよめ」と亡父（注―俊成）もいさめ申候し。

ここでは師に付き従うことの意味が説かれ、亡き父に学んだ「心をよくすます」態度の大切さが説かれている。また、

「性もほれ、かへりてしりぞく心」との葛藤も指摘されていることに注目すべきである。

さらには、「稽古」と題詠の関わりを述べた箇所がある。

はれがましき会合の時ハ、あまりに哥かずおほくよむ事不可然候歟。稽古も初心も用意おなじ事にて候。百首などの続哥にハ四五首、已達は七八首、よき程にて候べし。初心のほどは、ひとり哥を常二はやくもをそくも自在ニうちよみならハすべく候。よみすてたらん哥を無左右人にちらしみする事ゆめゆめあるべからず。いかにも未練の程ハ、日比よみなれたる題にてよむべきにて候。あからさまにも座ただしからずしてよむべからずといさめ申候しに候。

歌会などでの適度な詠作態度や題詠といっても「座ただしからずしてよむべからず」という諫めの言葉が亡き父から教えられたことを記している。

繰り返し言うが、頼阿は最終的には歌道を選択したということである(注12)。自己研鑽の現れである和歌表現を追求することにより、自己存在の具現化が達成されていったということである。

六 頼阿の和歌構造

最後に頼阿の和歌構造について述べておきたい。とりわけ晩年の二条為定・為明撰による勅撰歌及び冷泉為秀との詠歌に注目し、残存する頼阿の連歌に同じ発想はないかを捉えてみたい。★に上下句のキーワードを抜き出し、必要に応じて宣阿注の『諺解』(注13)、宣長注の『玉箒』(注14)の解、さらに頼阿の連歌例を付すことにする。

○二条為定撰の詠歌・新千載集(為定撰、延文四一三五九年十二月二十五日返納)(四首入集のうち二首、このころ頼阿七十一歳)

彈正尹親王家五十首に、擣衣（注15）

1 秋の夜は誰まちこひて大とものみつのとまりに衣うつらん

（草庵集 609）

★（上の句）秋の夜、まつ…（下の句）（大ともの）みつのとまり、衣うつ

『諺解』では本歌として「いざ子共はや日本へ大伴のみつの浜松まちこひぬらん」、「帰るべきこしの旅人待わびて都の月に衣打也」などを引いている。頓阿の連歌例として、「きぬたの音ぞ高く聞える／秋寒き嶺の庵に人すみて」（続草庵集 595）を挙げられるが、記憶の中での「大伴の御津のとまり」を思い出し、衣うちの音に思いを馳せている。

東山に住侍し比、民部卿花のさかりにたづね来られし後、申をくられ侍し

山ざとの梢はいかに成ぬらんみやこの花は春かぜぞふく

返し

2 山ざとはとはれし庭もあとたえてちりしく花に春風ぞ吹

（同右 219）

★（上の句）山ざと、庭…（下の句）花、春風

頓阿の連歌例として「月をみて枕さだめぬよもすがら／風におきふす庭の荻はら」（続草庵集 588）を挙げられるが、『諺解』の「かこつ心」とは誤りであろう。むしろ季節の変わり目を春風で知り得た喜びの方が大きい。

○二条為明撰の詠歌・新拾遺集（為明・頓阿撰、貞治三1364年十二月返納）（十四首入集のうち二首、このころ頓阿七十六歳）

入道二品親王家五十首に、月前虫

3 ふかき夜の露に草葉はうづもれて虫のねたかし野べの月かげ

（続草庵集 234）

★（上の句）夜の露、草葉…（下の句）虫の音、月かげ

『諺解』で「一入高く聞ゆる」、『玉篋』で「いよいよたかし」と、ともに肯定する。「虫の音」を「月かげ」が効果的には照らして、不思議な感覚にとらわれる。

民部卿家百首におなじ心（注―待空恋）を

4 更けぬるをうらみんとだにおもふまにこぬ夜しらるる鳥の声哉

（草庵集 976）

★（上の句）更く、恨み：（下の句）夜、鳥の声

『諺解』で本歌として、源氏物語「簾木」巻の「見し夢をあふ夜ありやとなげくまにめさへあはでどころもへにける」を引いている。恨みをもって過ぎした時が過ぎさり、いつの間にかいつもの孤独感を取り戻している。

○冷泉為秀との交誼（為秀宰相は延文六1361年に参議、『続草庵集』のみ、九首入集のうち四首、このころ頼阿七十三歳）

冷泉宰相、蔡花園にて人々さそひて歌読れ侍しに、山花

5 吹おろすあらしぞ匂ふ山たかみはれぬ雲井やさくらさくらん

（続草庵集 38）

★（上の句）あらし、匂ふ山：（下の句）雲井、さくら

頼阿の連歌例として「山路は猶も秋のおもかげ／ふる雪をきくより後の花とみて」（同右 566）、「雪のはれまに雲ぞ残れる／ちる花にをくれてさける遅桜」（同上 604）を挙げられるが、『諺解』の「花を吹おろすにハ非、嵐の吹て下るが匂ふ也」ということがあり得るのであろうか。むしろ遅桜が咲いている感情に浸っている方がよい。

冷泉宰相、蔡花園にて歌読れし時、おなじ心（注―落葉）を

6 風はなどさそひすつらん露霜のさしも染てし山の木葉を

（同右 272）

★（上の句）風、露、霜：（下の句）山、木葉

『諺解』で本歌として「／＼かくとだにえやはいぶきのさしもくささしもしらじなもゆる思ひを」、「／＼人づてハさしもやハとや思ふらんみせバや君になれる姿を」を引いている。ただし、「風ハなど心もなく吹ちら」すとはとらない。「など」には反語の意があるので、ここは「どうしてつれなく捨ててしまおうか」とし、下の句の「さしも」は「あんなに」の意として解する。

冷泉宰相、蔡花園にて歌読れし時、滝氷

7 滝つせに中なるよどのなかりせばなにをたよりに氷そめまし

(同右 287)

★(上の句) 滝つせ、よど…(下の句) たより、氷

頓阿の連歌例として「滝はいつより氷とつらむ／山里はひとひもおちず降雪に」(同右 639) を挙げられるが、『諺解』のように「恋の淵瀬」として解することもあり得ようか。とはいえ、頓阿にその心があると言えば違うであろう。むしろ歌人としての裁量を述懐的に自問しているようでもある。

冷泉宰相、歌よまれし時、寄雨恋

8 雨にだにさはるばかりのうき中にしげき人めのひまはたのまじ

(同右 363)

★(上の句) 雨、うし…(下の句) 人め、たのむ

もちろん「雨にさはる」とは、伊勢物語の「／＼あさみこそ袖はひづらめ涙河身さへ流ると聞かばたのまむ」、「／＼かすかずに思ひ思はず問ひがたみ身をしる雨は降りぞまされる」(百七段) を本歌にしている。頓阿の連歌例として「なににさはりてとはず成らん／雨の夜の明ぬるにだにこし物を」(同右 646) を挙げられるが、純情な思いを「しげき人め」でなくしたくないといっているのであろう。

冷泉宰相、蔡花園にて歌読れしに、同心(注―神祇)を

9 関わたるあまの浮橋とをけれどいまも神代の道ぞ残れる

(同右496)

★(上の句) 関、あまの浮橋…(下の句) 神代、道

『諺解』で「天のうきハしの哥の事ハ数千万年とをき事なれども、今も猶神代の和哥の道ハ残りてさかゆる也。これ神の恵と也」とし、「数千万年」は少し大袈裟だが、おおむね首肯される。肝心なのは「あまの浮橋」への一途な思いである。

これらの和歌表現の特徴を捉えてみよう。まず題詠によってもたらされた詠作対象への真摯なまなざしがあることである。それは「実の理」(注16)というよりも、まことを尊ぶ心があるということである。次に新たな情趣をつかみとっているということである。それは冷静なまなざしで対象とのぎりぎりの近接に挑もうという姿勢によってもたらされているといえよう。

頓阿の発想法としては、本意・本説で付け合うことを一つの手法とする「寄合」(注17)と通じるところもある。その意味では「問答的性格」と名づけられた(注18)詠法も、その一つということになる。

また、頓阿の詠歌で気づかされるのは、題詠歌が多いことである。とりわけ複合題が多く、題詠による詠作対象に近接しようという強い意識がみられる。頓阿には自ら企画して親王や大臣に題を要請して催した歌合が多く存在する(注19)ことにも、題詠に対した詠歌体験の積み重ねを重視する頓阿なりのこだわりを見出すことができる。

これらはみな蔡花園での自由な生活の中から生まれたものである。六十歳をこえたころ(注20)には、この場所に居住し、静かな隠遁生活を過ごしていたと思われる。とはいってももの頓阿の信条は歌壇と交誼を絶やさないことにあった。ここにみてきた冷泉為秀の訪問もその中の営みの一つであったのである。孤高であればあるほど、時折の歌人との交誼には密な効果をもたらす。そのことによって生み出された詠歌は歌人としての本道の姿が現れたといえよう。

おわりに

頓阿は二条家伝の正統な伝受者の立場にしながら、他家他流との交誼の機会を数多く積み重ねてきた。和歌道を追求する頓阿にとって最後に到達したのは、子孫に伝領されることになる蔡花園での静寂な生活であったと思われる。そのころには和歌表現においてある領域が達成されているということができよう。

最後に頓阿の晩年の心を詠みこんだ一首を示しておく。これには「冷泉宰相来られし時、閑居」という詞書がついている。

かくれがもいまは尋しいづくにも老てすむこそしづか也けれ

(続草庵集419)

(注記)

1 稲田利徳氏の「頓阿の歌歴」(『和歌四天王の研究』所収、笠間書院)に指摘がある(41―42頁)。四天王のうち、頓阿以外の「古今集」家説の伝受を示すと、浄弁が元亨四1324年十月十四日、兼好が同年十二月十三日、慶運が父浄弁を介して正中三1326年四月二十日。

2 『井蛙抄』の本文引用は拙著『井蛙抄雑談篇 注釈と考察』(和泉書院)による。

3 『俊頼髓脳』(静嘉堂文庫本「無名抄俊頼」)には平安初期の連歌の例が記される。「連哥こそ、よのすゑにも、むかしにをとらず見ゆるものにてハ候へ、むかしハありけるを、かきをかざりけるにや。躬恒、＼おくやまにふねこぐをとのきこゆるは、貫之、＼なれるこのミやうミわたるらん」とある。これは、躬恒と貫之とが連れ立ってあるところへ出かけた折、おく山にそま人が木をひく音が舟を漕ぐ音に似ていたので、それを聞いて詠み合ったもの。この書にはほかに計三十九句、計四十句の連歌が引用されている。

4 本文引用は岩波古典文学大系本(救済奥書本)による。

5 貞和二1346年二月二十九日に関白氏長者に詔せられた良基は武家奏聞により後光厳天皇の綸旨を受けて、菟玖波集を「准勅

撰」としている。このことは、すでに太政大臣を辞していた洞院公賢が「初聞、此事誠希有事歟」と記す（延文二一三57年八月六日条）。

6 『草庵集』『続草庵集』の本文引用は私家集大成本（書陵部蔵本）による。

7 参考として『諺解』の注をいくつか示しておく。567に対して「遼東城門有華表柱、忽有一白鶴集柱頭、時有少年拏弓欲射之。…」の『搜神記』、570に対して「薄の袖」の故事（「袖中抄・藻塩草に委——」）、573に対して（「蟬」頭上有綉敗其文也」の「寒蟬腑席」、588に対して「よひよひに枕さだめん方もなしいかにねし夜か夢に見えけん」（古今集恋一516）をそれぞれ引く。

8 『井蛙抄』巻六（一〇三節）のうち、頓阿晩年の記述となる後半の七節（八五、八七、九四、九六、九九、一〇二、一〇三の各節）には、定家回帰の傾向がある。また、頓阿は晩年冷泉為秀の教えを受け（冷泉家時雨亭文庫本『了俊歌学書』）、伝本を目にしていることが、巻六の後半の三つの為秀伝（九九、一〇二、一〇三の各節）を記すことになる。なお、拙論『俊頼髓脳』における題詠論（『日本文藝學』第二十二号所収、昭和六十一985年十一月五日発行）では、「まはして心をよむ」「ささへてあらはによむ」の題詠の意味として次のように述べたことがある。すなわち、「歌論として題詠に於ける表現の問題を表現態度論として示し、縁語・掛詞などの具体的な表現様式を示すことにより、特に複雑な心理を描く恋題の分立、その「題の心」の定立を行おうとした」。

9 良基の『連理秘抄』には、当時の式目の流行について、次のように述べる。「建保の比より、後鳥羽院殊にこの道を好ましめ給て、定家、家隆卿など細々に申行はれけるにや。懸物百種を句に随ひて給はせけるなど、この人々も多く記しをかれたり。八雲の御抄にも末代殊に存知すべしとて、式目など少々記さるるにや。為家為氏卿みな相続して賞翫せられける故に、この道いよいよ盛にして、家々の式など多く流布せり。近比為世、為相卿、為道朝臣みな達者にて、朝夕に翫ばれけり。地下にも花の下月の前の遊客、上手多くきこゆ。当時も本式新式などいひて、方々にわかれ所々に集會す」。

10 冷泉家時雨亭文庫の解題（上條彰次氏執筆）によると、冷泉家本の出現によって伝本の分類がより明確になったという。そこでは冷泉家系統本を第一類、二条家系統本を第二類とする。また、「原形本」について次のように記す。「定家『被草本』には本来なかつたこれらの本文が、為家筆本には、あるいは他の本文と多少区別したそれと判るような形態で補入されていたとも考えられる。そしてこの為家筆本を書写した為秀は、間接話法的本文の箇所を定家『被草本』にはなかつた部分として、写すことを慎んだのであり、この墨消ちがその証跡となると考えられる」（解題70頁）。

11本文引用は冷泉家時雨亭文庫本の影印本を翻刻し、オドリ字・濁点等読みやすく直した。

12(注1)の稲田氏の著では次のように述べる。「頼阿にとって真剣に対峙すべきは歌道であろうが、連歌方面にも関心を示すところに、当時の風潮を鋭敏にキャッチする資質が窺える。これは同じ四天王でも、連歌に批判的なたいどをとっていた兼好などと比較すると、その相違が際立っている」とある(55頁)。

13本文引用は宣阿著『草庵集蒙求諺解』(享保八年八月吉日刊)の影印本(笹川祥生・上野洋三編『本文と索引』和泉書院)により、該当箇所を翻刻し、オドリ字・濁点等読みやすく直した。

14本文引用は本居宣長全集第二卷(筑摩書房)による。

15題詠で問題とされる「題の心」について触れておく。題詠の歴史で今回扱っている「擣衣」「月前虫」「待空恋」などの複合題が入集した勅撰集は後拾遺集または千載集あたりからである。その以降の歌学書で「題の心」が問題視された。中でも『長明無名抄』(建暦元1211年以後の成立)には巻頭に「題の心」とあり(竹伯園蔵古写本)、次のように記す。「題ノ歌ハ必志ヲフカクヨムベシ。タトヘバ祝ニハカギリナクヒサシキ心ヲイヒ、恋ニハワリナクアサカラヌ由ヲヨミ、若ハ命ニカヘテ花ヲヲシミ、家路ヲワスレテ紅葉ヲタズネムゴトク、其物ニ志ヲフカクヨムベキヲ、古集ノ歌ドモノサシモヨミエヌハ歌ザマノヨロシキニヨリテ、其難ヲユルセルナリ」。すなわち、題の対象に思いをめぐらして詠むことである。一方、『井蛙抄』では題について次のように記す。「又云。民部卿入道被申しハ、古哥の一句をきりて題に出してよむが、初心ノケイコニハヨキ也。古哥ノ詞ニカハリメナキヤウニイヒツヅケントスル程ニ、哥ノ躰もよくなり、詞も優ニなる也。」(巻六第六七節)として、初心者の稽古として題詠を勧めている。引用の各題を検討すると、「擣衣」の題には、先行例として、千載集から二首を引くと、「松かぜのおとだに秋はさびしきに衣うつなり玉川の里」(俊頼34)、「たがためにいかにうてばかから衣ちたびやちたび声のうらむる」(基俊34)があり、頼阿歌では「誰まちこひて」として、秋のさびしさを詠み込む。「月前虫」には「月のすむあさぢにすだきりぎりす露のおくにや秋をしるらん」(山家集393)、「よるの風さえゆく月にたが秋の衣おりはへ虫のわぶらん」(拾遺愚草1863)があり、頼阿歌では秋を知る材料でもある「野べの月かげ」と詠む。「待空恋」には先行歌の例が少なく、「こぬまでもまつはたのみのあるものをうたて明行く鳥の声かな」(続拾遺907、平頼泰)があり、頼阿歌では「こぬ夜しらるる」と詠む。「山花」には「しら雲とみねにはみえてさくら花ちればふもとの雪にぞ有りける」(千載集79、伊通)があり、頼阿歌では「はれぬ雲井」と詠む。「落葉」には「みむろ山もみぢちるらしたび人のすげのを

がさににしきおりかく」(金葉集二度²⁶³、経信)があり、頓阿歌では「さしも染てし」と詠む。「滝水」には「谷ふかみ山風さむきたちつせのなかなるよどやまづこほるらん」(続千載集⁶³⁷、御製)があり、頓阿歌では「よどのなかり」と詠んでいる。「寄雨恋」には「いろにいでぬおもひのみこそときは山わがみしぐれはふるかひもなし」(続古今⁹⁹⁸、宮内卿)があり、頓阿歌では「さはるばかりのうき」と詠む。「神祇」には「みかさ山さしてきにけりいそのかみふるきみゆきのあとをたづねて」(千載集¹²⁵⁶、上東門院)があり、頓阿歌では「神代の道」と詠む。

16 宣長の『玉箒』には、「実の理」と「作者の見る心」を区別する批評意識を繰り返す。一例を示す。「わきてなどつれなかるらん出る日のひかりに近き峯のしら雪」の一首に対して、「歌の心、物の全体の理と、作者の見る心とをわかつて心得べし。まづ雪は平地は早くきえ、高山は久しくのこるは全体の理也。高山は寒き故也。然るに作者の見る心は、峯は日にちかければ、外よりも早く消べき事と思ふ心にて、分てなどつれなく残る事ぞと読る也。是物体歌を心得るに益ある事なり。此事下にもいふべし。合わせ考ふべし。わかちて心得ざれば混雑する事おほき也。」(注¹³ 第二卷²⁴⁷頁)

17 良基の『連理秘抄』には、「寄合」の技法を次のように述べる。「寄合は作者の風骨によりて、すべて定まりたる所あるべからず。恋の句に人を忘るるとも付くべし。月の句に雨のふれかしたも、花の句に風の吹かしたもすべし。是はすべて世に背きたるやうなれども、句の体に随ひて上手の面白く取成すなり。又見る様に籠れる所もなく、月とあらば山の秋風とも、花とあらば峯の霞とも、か様の物をちとも働かさで、景気眺望を興ありて付るも子細なし。又秋といふ句に春、野といふ句に山、朝といふに夕、かやうに引違へて付るも、一の体也。又一向言葉の縁も寄合もなく心ばかりにても、又一文字、二文字にて何のあひしらひもなければ付る事もある也」とある。

18 渡部泰明氏の「頓阿論―題詠のポエジー」(岩波書店『文学』二〇〇六年五・六月)。渡部氏の言う問答とは、「位相差のある二つの主体を微妙な距離を置きつつ繋ぎ合わせる詠み口」であり、それは「連歌的方法、贈答歌的方法、「贈答躰」の本歌取りの方法、いずれにも共通する」とする。

19 頓阿詠の歌の詞書には、「題をさぐりて…」とするものが多く存在する。これは頓阿が題を要請して詠歌体験を重ねていたことを示す傍証になる。

聖護院法親王家題をさぐり歌よまれし時、春月

三宝院僧正清閑寺坊にて、題をさぐりて花百首歌よみ侍しに、花匂

梶井宮にて題をさぐりて歌合せられ侍しに、早苗

陸奥守顕氏題をさぐりて歌合し侍りしに、水辺蛩

金蓮寺にて題をさぐりて月百首歌よみ侍し、おなじ心（注―八月十五夜）を

二条入道大納言、長樂寺ある所にて、人々さそひて題をさぐりて歌合せられ侍しに、擣衣

寂恵法師題をさぐりて歌合し侍しに、春恋

刑部少輔大江広房題をさぐりて歌合しに

人々題をさぐりて歌よみ侍しに、寄述懐

前関白殿、題をさぐりて歌よませられしに、寄涙述懐

民部卿家にて、題をさぐりて歌よまれしに、旅泊雨

前関白殿にて、題をさぐりて歌よみ侍し、釈教

人々題をさぐりて歌よみ侍しに、寄浦祝

將軍家に題をさぐりて人々歌読侍しに、梅風を

関白殿より題を給て、読て奉し歌に、帰雁

聖護院宮に題をさぐりて、歌読られしに、山家花

古集五言一句題にて読侍し百首に、秋声帯雨荷

新拾遺撰びはじめられける日、題をさぐりて歌よまれしに、おなじ心（注―述懐）を

同（注―御子左大納言）家に、久安百首題にて歌よまれしに、はなこ、あかつき、けい

20 稲田氏の「蔡花園の風流」（注1）掲載書所収）には、「西行上人集」奥書（石川県立図書館李花亭文庫蔵本及び大東急記念文庫

本）によると、「頼阿が貞和四一三48年、六十歳以前に、仁和寺庵室に移住していた」、「と同時に、その庵室は蔡花園と命名された場所にあった」とする（74頁）。

「仏法練行ノ心」と和歌

※本稿は「第一〇三回大会中世文学会 平成十九年度秋季大会」(於 福岡女子大学)での口頭発表の一部に加筆したものです。席上、ご質問いただいた稲田利徳先生をはじめ、諸先生方に感謝申し上げます。